

はじめに

「一寸法師」と「桃太郎」のお話をミックスしたものです。お母さん方も、お話が単調になりそうでしたら、ストーリーをちょっと変えてみましょう。子どもはその意外性を喜び、想像力をかきたてられ、創造性も身につけて自分でお話をつくるようになるでしょう。そういう意味で一番最後におさめてみたわけです。子どもが混乱するのでは、と心配する人もあるかも知れませんが、それは間違いです。どう変化していくかわからないのが人生、とは少し大げさですが、親も先生も変化を余り喜ばず、そのため × 式の考え方に陥りがちです。しかし、子どもにはもっと選択の範囲を広げ、ゆとりを持って大らかに育ててやりたいもの。知っている世界から知らない世界へと子どもは旅立つことができるのです。変幻自在にやってみてください。提出漢字は「昔、お爺さん、お婆さん、山、川、柿の実、赤ちゃん、女の子、柿子、一寸柿子、都、風船、針」など。

それではね、皆さんにおもしろいお話してあげましょう。まだね、皆さんが一度も聞いたことのないようなめずらしいお話ですよ。さあどんなお話かな。このお話は、昔、昔、大昔のお話です。

昔あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは、川へ洗たくに行きました。そうみんな知ってる？ それはね、みなさんの知ってるのは桃太郎さんのお話。でも先生のお話は桃太郎さんのお話じゃないの。誰も知らないお話なの。これは先生だけが知っていて皆さんに特別にするお話です。

だから、ここまでは桃太郎さんと同じようだね。お爺さんが山へ柴刈りに、お婆さんが川に洗たくに行きました。これは桃太郎さんと同じ。でもこれからが違うんです。

お爺さんが山へ柴刈りに行きました。柴をたくさん刈って、そして「あーあ疲れた。ひと休みしましょう」とお爺さんは腰をどっこいしょとおろしました。「あーあ疲れた」と言いながらお爺さん、上の方を見上げますと、山のてっぺんに大きな柿の実がなっているのが目につきました。

柿の実、ね。こんなに大きな柿の実でした。「あーっおいしそうな柿の実だなあ、よし本に登って採ってやろう」お爺さんは木に登って行きました。そして、手を伸ばしてその実を採ろうとすると、どうしたことでしょう。ポトンと柿の実は落ちてしまいました。そうして山のてっぺんですから、下の方へコロコロところがって行きます。お爺さんはいそいで木から飛び降りました。そうして「こら待て、待て、待てえ」と一生懸命になって追いかけますが、お爺さんの足では追いつきません。

柿の実の方が早い。コロコロコロ、コロコロコロところがって、たちまち見えなくなってしまいました。お爺さんは追いかけるのはあきらめました。「あーあ、わしの足でとても追いつけない、あきらめましょう」。お爺さんはもとへもどって行きました。

さてこちらはお婆さんです。お婆さんは川で洗たくをすませますと、お家へ帰って、お爺さんの帰りを待っていました。「お爺さん、帰りが遅いなあ。どうしたんでしょう」心配しながらお婆さんはお爺さんの帰りを、まだかまだかと待っていました。すると、表の戸がコトンと音

がしました。「あっお爺さんが帰って来た。お爺さん、お帰りなさい」

戸を開けてのぞいてみると、お爺さんはいません。そのかわりに何があったとおもいます？ そう、柿の実がそこにおいてありました。お婆さんはそれをみてびっくりしました。

「おやッ柿の実がこんなところに、どうしたんでしょうねえ。それにしても大きな、おいしそうな柿の実だこと。あ ちょうどいい、お爺さんが帰ってきたらこの柿の実を二人で半分こして食べましょう」

お婆さんはその柿の実を拾って、お家に入り、お爺さんの帰りを待っていると、「ただいま」と言ってお爺さんが帰ってきました。

お爺さんはお婆さんの手の上にある柿の実をみてびっくりしました。「おや、この柿の実はたしかに山の上で私が採ろうとした柿の実だ、どうしてお婆さんの所にあるんだろう」。どうしてあるとおもう？ そう、ころがってきてね、そうして山のふもとにあるお爺さんお婆さんの家の戸にコトンとぶつかってね、そこで止まったわけ。

さて、お爺さんとお婆さんはね、包丁を持ってきて、この柿の実を切ろうとすると、なんと柿の実はひとりでにポコーンと割れて、中から赤ちゃんが「オギャーオギャー」と言いながら生まれてきました。

「知ってる！ 桃太郎だ」

そう桃太郎と似ているね、でもこれは桃じゃないよ、柿の実だよ。それでお爺さんとお婆さんは大喜び。私たちは子どもがいなくてさみしかったけれども、これでいい。きっと神様がかわいそうに思って、私たちに授けて下さったにちがいない。さあ名前をなんとつけようかと考えました。

なんという名前をつけたと思う？

「柿太郎！」

柿太郎、桃から生まれた桃太郎があるから、柿から生まれた柿太郎なかなか君はお利口だよ。でもね、この子は男の子じゃなかったの。女の子だったの。女の子に柿太郎はおかしいね。何て言ったらいいの？ 女の子なら何てつけたらいいだろうな。柿がついて、そう、柿子という名前をつけました。柿から生まれた女の子。柿から生まれた女の子だから、柿子という名前をつけました。そう考えたよね。

それでね、この柿子ちゃん、柿から生まれたから、もちろんこんなに小さかったんです。生まれた時にね、ところが桃太郎さんのようにはちっとも大きくなりません。桃太郎は大きくなって鬼退治ができるほど立派な男になりましたよね。ところがこの柿子ちゃんは、いくらごはんを食べさせてもちっとも大きくなりません。いつまでたってもこんなにちっちゃいの。こういうちいちゃい長さのことを昔は一寸といいましたよ。

「一寸法師！」

そうそう一寸、皆さんは一寸法師というお話知っている。一寸法師というのはね、このぐらいの子どもだったのね。このぐらいの長さのことを昔は一寸といったからね、一寸法師。この柿子ちゃんてこんな小さいでしきつ。だからみんながね「一寸柿子ヤーイ、一寸柿子ヤーイ」てね、みんなが馬鹿にするの。柿子ちゃんはねえ、お利口でね、とても勉強好き。特に、漢字を覚えるのが上手だった。皆さんと同じようにね、漢字を一生懸命になって勉強しました。そうしてまた覚えるのが早い。皆さんもたくさんの漢字を知っているようだね。ただども柿子ち

ちゃんもものすごい漢字の物知り。

でも、みんながね、「一寸柿子ヤーイ、チビ助ヤーイ」と馬鹿にするので、柿子ちゃんは考えました。なんとかして大きくなる方法はないだろうかって考えたの。ごはんをうんと食べてもちっとも大きくなりません。一生懸命になって運動もしました。でも、ちっとも大きくなりません。その時、柿子ちゃんは「そうだ、いい考えがある」 いい考えを思いついたんです。なんだと思う？

「わかんない！」

そうわかんない。それはね、一寸法師さんのことを思い出したの。一寸法師さんは私と同じように身体が小さかった。でも、一寸法師さんは立派な大男になりました。なんで大きくなったのかな？ うちでのこづちを知ってる？ うちでのこづちというものがあって、あの、鬼が持っていて、そうして鬼が一寸法師さんにやっつけられて、逃げる時に忘れておいていったでしょ。あのうちでのこづちというものは、何でも望みがかなうというつちでしたね。それで一寸法師さんは、お姫様に「一寸法師大きくなれ！ 一寸法師大きくなれ！」と言って、うちでのこづちをふってもらいました。それで、あんなに大きくなったんですね。

その一寸法師のことを、柿子ちゃんは思い出した。

「そうだ、一寸法師さんにあのうちでのこづちで大きくしてもらえばいいんだ」

一寸法師さんは都にいます。都って知っていますか？ 都というのは、天子さまのいる、国で一番大きな町です。そこには大勢えらい人がいてね、とてもにぎやかなところです。そこに、今は一寸法師さん

はね大臣となってね、そうしてもう、立派な人になって活躍しています。その都へ行って、一寸法師さんにね、なんとかして大きくしてもらいましょうというわけ。

ところで柿子ちゃんがね、お爺さんとお婆さんに、私は都へ行って一寸法師さんに会って、大きくしてもらおうと思いますと言ったけれども、お爺さんとお婆さんは心配でね、許してくれません。

「都はね、遠いんだよ、お前のような小さいものに行くのはとても危険、私のような大きな大人でもとても都にはいけない」

そう、昔はね電車もなければ自動車もない。どこへでもみんなが歩いていくほかはなかったんです。だから、都へ行くのは大変な仕事なんです。だから、もう柿子ちゃんが都へ行くとっても、お爺さんお婆さんはなかなか承知してくれなかった。

でも、柿子ちゃんをあきらめなかったんです。そうして毎日、毎日お爺さんとお婆さんに向って「お爺さんお婆さん、私を都にやらせて下さい。私はきっと一寸法師さんに会って、立派な人になって帰ってきます。そうしたらお爺さん、お婆さんに孝行ができます。ぜひ都に行かせて下さい」 もう毎日、毎晩熱心に頼んだ。

あんまり熱心に頼むので、とうとうお爺さんもお婆さんもね、それほどいうなら、都へ行くがいい、でも都へ行くのは大変だからどうしよう。一寸法師は、おわんの舟に乗って行ったけれども、ここは都の方へ向って流れていく川がない。川が都の方へ向って流れていけば、一寸法師さんのようにおわんの舟に乗っかっていけば、都へ行けますよね。でもそれが出来ない。どうしよう、どうしよう。

いろいろ考えました。その時またいい考えが思いついたんです。

それはね、風船なんです。「お爺さん、風船を買ってきてちょうだい。お婆さん、お婆さんは私にお婆さんが使っている針を一本ちょうだい」 お爺さんに風船を用意してもらい、お婆さんに針を用意してもらって、それを針の刀を腰にさし、風船にぶらさがってお空へ登っていった。お空へ登ると、お爺さん、お婆さんが豆つぶのように見えます。

「お爺さんお婆さん、行ってまいりませう」

お爺さんとお婆さんは下の方から柿子ちゃんを見上げて

「行ってらっしゃーい、元気に行ってくるんだよー」。

ところがねえ、途中で、大変なことが起こったんですよ、台風にあっただし、それから鳥にもおそわれました。でも無事に都について、そうして風船に穴をあけて下へ降りると丁度いいことに一寸法師さんのお家で、しかも一寸法師さんが庭を散歩している、その頭の上へおりてきたんです。「おや、何だろう」 一寸法師さんは頭の上をなでてみると、柿子ちゃんがいます。

「おや、まあ僕が昔の一寸法師だった時のように小さなかわいらしい女の子。どうしたの？」

「はい私は柿子と申します。一寸法師さんに大きくしてもらおうと思ってやってまいりました」

「ああそうか、そんなことはおやすい御用」

一寸法師さんはさっそくうちでのこづちを持ってきて「柿子ちゃん、大きくなれ／＼ 柿子ちゃん、大きくなれ／＼」と言って、うちでのこづちを振りまいた。そのたびごとに、ぴよこん、ぴよこん、ぴよこん、ぴよこんと柿子ちゃんの背が伸びて、こんなに立派な女の子になりました。そ

して柿子ちゃんはね、立派な女の子になって、お爺さん、お婆さんのところに帰って来ました。お爺さんとお婆さんも大喜び。それから三人は幸福に暮らしたということです。これで一寸柿子のお話はおしまい。(拍手)

ハイ それではね、ここに字が書いてあるね。読めるかな、これ、なんていう字かな？

「むかし！」

そう昔という字でしたね。はい、じゃあこれ！

「おじいさん、おばあさん、やま、かわ！」

「かきのみ、あかちゃん、おんなのこ、かきこ！」

これをこうくっつけて、なんと読みますか？

「いっすんかきこ」

はい、この字はなんていう字。

「みやこ！」

はいこれは、

「ふうせん！」「はり！」

これだけの字をね、今、お話を聞きながら習いましたね。ハイッじゃこれでおしまい。(拍手)